

昨年度のメールでの問い合わせ状況



昨年度の古紙ネット宛てメール件数は46件でした。

ホームページに掲載している資料の使用許可やリンクのお願いが4件、武田氏への対処はどうかなど武田氏関連が4件、その他、地方自治体の職員や議員から古紙配合率の高いコピー用紙の入手方法について、また封筒についてなどの問い合わせがありました。これまで使っていた古紙100%の用紙が入手できなくなり困って聞いて来られた方が多かったようです。古紙に関心のある大学生から「話を聞きたい」という依頼もありました。

牛乳パックについて興味深い問い合わせがあり、少し調べてみましたので、ご紹介します。

質問は、「缶 to 缶」「ペット to ペット」などは聞くが、牛乳パックから牛乳パックへのリサイクルはできないのかという内容でした。いわれてみれば当然の疑問なのですが、バージンパルプが当然だと思いこんでいたので、私自身考えたことはありませんでした。

早速、日本紙パック(株)のホームページのから質問してみましたが、原料の事まで聞いたためか、それとも個人名だったため怪しまれたのか、返事をもらえませんでした。

次に日本テトラパック(株)のホームページから古紙ネットと名乗り同じ質問をしました。同社はWWFとパートナーシップを結ぶほど環境に配慮している会社です。そのためか、それとも古紙ネットと名乗ったためかわかりませんが、下記のような丁寧な答えをいただきました。

一部を転載します。

「飲料用紙容器には、中身の保護と輸送・陳列時等の耐久性を確保するためかなりの強度が求められており、原紙メーカーからの供給をはじめ各工程での徹底した品質管理を行っております。そのため紙の原料となる木材も繊維が長くて丈夫な北米・北欧産の針葉樹を中心に用いているわけですが、紙の繊維はリサイクルして再商品化する際に、どうしても繊維が劣化し、強度的に飲料用紙容器には適さなくなるため、紙容器にはバージンパルプを使用しています。」

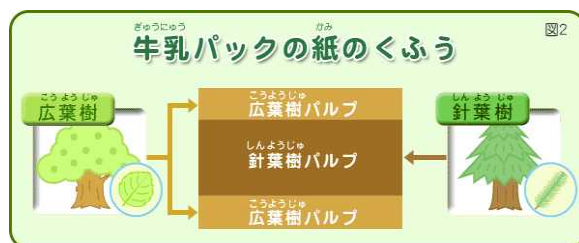
私の予想では、北米の製紙メーカーから原紙を輸入し、日本で紙パックに加工しているせいで、日本の古紙を使う余地はないのだろうと想像していたので、「強度のせい」という答えに驚き、改めてテトラパック社のホームページを調べたところ、確かに牛乳パックはかなり強度に気を使って作られていることがわかりました。

牛乳パックの仕組み

パックの紙部分の両面に薄いポリエチレンが塗られていることは、よく知られていますが、間の“紙”の部分も図のような3層構造になっているのです。針葉樹部分は強度のために、広葉樹部分はなめらかにするためとのことです。おそらくポリエチレンを塗るためなめらかにする必要がありますのだと思いますが、確かに古紙を使う余地は少ないように見えます。

ついでに、国産材を使えないか尋ねたところ、現時点では具体的な予定はないが要件さえ満たせば原紙材料の供給源として検討する可能性はあるとのこと。その要件とは森林管理制度やコストなどだそうです。

コスト面の壁は厚そうですが、将来的に日本のスギやヒノキを使った紙パックは不可能ではないようです。(事務局分室 栗岡)



日本テトラパック(株)のホームページより
ポリエチレンはこの紙の層の両面に塗られている